

受領者投稿

若手研究者と民間研究助成

大阪大学大学院基礎工学研究科 助教 安井 武 史
(第12回受領者)

立石科学技術振興財団から研究助成を受けた6年前は若手研究者(31才)であった筆者も、今年度から科研費・若手研究の応募年齢制限(37才以下)に引っかかり、若手枠もいよいよ卒業である。本稿では、若手研究者にとっての民間研究助成という観点から個人的意見を述べさせて頂こうと思う。

最近では若手研究者を対象とした公的な競争的研究資金が増加傾向であるものの、科研費(若手研究)に依存するだけでは、若手研究者の懐具合は一般に厳しいものである。このような若手研究者にとって、民間研究助成は極めて有り難い研究資金源である。民間研究助成の中には若手優先のものが少なくない上に、助成額もちょっとした研究を始めるには十分な額である(立石科学技術振興財団は高額の部類に入る)。筆者の場合、アイデア段階の研究テーマの取っ掛かりを掴むため、まず民間研究助成に応募することから始める。そして獲得した研究助成金によって研究が実際に動き出し、見通しが立った研究テーマに関しては公的研究資金によって研究を加速させるというのが1つのパターンである。また、予算獲得のためには、研究アイデア・研究業績と共に、予算申請書の作文能力も重要なファクターである。この予算申請書の作文スキルを磨くという観点でも、民間研究助成への応募は非常に有意義であったと思う。例えば、専門外の審査員でも魅力的に思わ

せる予算申請書を作成するためには、小難しい研究の話をかみ砕いて分かり易く説明し、直感的にその内容を訴える必要がある。また、頭の中では研究を整理し

ていたつもりでも、実際に予算申請書という文書にしてみるとその論理展開の矛盾に気付くこともある。筆者の場合、様々な民間研究助成に応募する過程の中で作文スキルが向上すると共に、研究内容がクオリファイされて、その後の競争的研究資金の獲得に繋がっていったように思う。

最後に、筆者の助成テーマは『フェムト秒2色パルス光を用いた時間分解旋光分散測定法の開発と血糖測定への応用』である。『光を用いて血糖を測る』という萌芽的な研究にも関わらず、若手研究者にとっては少なからずの研究助成金を頂き、研究を行っていく上で非常に助かった。幸いにも研究成果を原著論文2編と解説論文1編にまとめることができた上に、関連テーマで博士(工学)学位を取得した堀泰明君(現 産総研)が平成18年度日本光学会奨励賞を受賞するという想定外のご褒美まで頂き、個人的には最も実りの多い研究助成金であった。ここに深謝します。

